大妣の文学者・遠藤周作に捧ぐ　2023 年 3 月 10 日

地の涯てにあるというそこに魅かれていた

そこに
「沈黙の碑」と
　　＜人間が
　　こんなに
　　哀しいのに
　　主よ
　　海があまりに
　　碧いのです」＞
ということばが
　刻まれていた

そこは
地の涯　この世の果て
で
キリシタン信仰が上陸した最西端の地
であるが
じっさいには

「外海」と書いて
「そとめ」と呼ぶ

外目にはどう見えるか？
そして
内目にはどう見えるか？

そこは
「出津」と書いて
「しつ」と呼ぶ

SHITSU のことを
わたしは
悉とも

質とも
執とも
疾とも
　呼んできた

東北には
志津
と書いて
同じく「しつ」
　と呼ぶ地名がある

うつくしい名前だ

「しつ」の「そとめ」のその地に
西海の断崖の上に
この世の涯ての　涯ての果てに
その長崎市遠藤周作文学館はあるのだ

いつからか　なにゆえか
われは遠藤周作が好きで好きで
彼の人柄も文学も好きで好きで
なぜこれほどあからさまにあっけらかんに好きだと言えるのか不思議なくらいに好きで
われながら　呆れ　笑えるほどだが

そんなこの世の涯てに誘われて
遠藤周作文学館を訪ねたのだ
オホナムヂが須佐之男命のいる根の堅州国と訪ねていったように

その遠藤周作が大好きなのがお母さんである
お母さんなしに遠藤周作は成り立たないのである

その遠藤周作のイエスは母なるイエスだ
と喝破したのが
遠藤文学を理解した
同じ慶應義塾大学出身の文芸評論家江藤淳だった

遠藤よ
江藤よ
えんえんとうよ！

そうであろう
そうであろうとも
そうであるにちがいなかろうとも

たしかに
遠藤の信仰の核心には　母がいる
ははがおる
おおははがいる
そして
実在の遠藤郁がいる

だから
遠藤の文学的故郷には「はは」がいて
その「はは」は
常世の国や根の国や妣の国の大妣ともつながっていて
その「大妣」を『古事記』は「伊邪那美命」と呼んだのだった

だから
遠藤周作の母の遠藤郁の向こうに大妣のいざなみを透かし見る

そして
遠藤のその「遠目」の中にスサノヲのまなざしを見る
この世の涯ての「外海」の「そとめ」でスサノヲとイザナミを視る

だから
そんな遠藤文学は
スサノヲ文学である
大妣を思慕する
スサノヲ文学である

　　八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに
　　八重垣作る　その八重垣を

そのスサノヲ文学であることが　わたしを引っ張り　引き摺り　引き回す　のである
そして
恥ずかしげもなく
泣かせるのである

遠藤はスサノヲを通して
ははを
そして
母なる神イエスを
大妣を抱く

そして
大妣に抱かれる

この世の涯ての　その果てで

「見つかった　永遠
太陽と手を取り合って往った海」
の
その永遠の海の大妣に
いだかれる

のである

わたしは
その地の涯ての
大妣の大ふところの「ラ・メール」というレストランで
カツカレー定食を食べたのだった

青い　蒼い　碧い　海を見ながら